

皆様とともに、BSE問題を考えつづけています。



その発生以来、今も私たちの食生活に影響を与えているBSE問題。食品安全委員会は国内国外を問わずBSEに関する科学的な情報を収集するとともに、消費者や食品関連事業者などの皆様にそれらの情報から得た知見を広くご紹介し、科学的知見を共有しながら「安全と信頼」を築くための取組を続けています。

その一環として、2004年秋から冬にかけて全国各地で意見交換会を開催するとともに、10月と12月には、世界各国より専門家を招いて、意見交換会を行いました。

▶ http://www.fsc.go.jp/koukan/dantai_jisseki.html

● 諸外国のBSE問題への取組から、日本における対策を考える。

10月19日に東京・青山において、「英国におけるBSE対策の変遷とリスクコミュニケーション」と題し、英国獣医学研究所の元病理部長で SEAC(※)委員も務めたレイ・ブラッドレー博士が講演。その中で同氏は、英国で30ヶ月齢以上の牛は食用



としない、という規制が緩和されることに触れて、「BSE対策は状況に応じて変化していくものだ」と述べるとともに、安全対策にはSRM(特定危険部位)の完全除去が極めて重要であると指摘しました。

10月29日には東京・三田において、英国獣医学研究所のダニー・マッシューズ博士、スイス獣医局のダグマー・ハイム博士、ニュージーランド食品安全庁のスチュアート・マクダイアミド博士の3氏による講演等を行いました。マッシューズ博士からは英国の17年にわたるBSE対策の流れとBSEについての最新の科学的知見、ハイム博士からは「検査で陰性であっても感染しているかかもしれず、消費者を守る対策としてはSRM除去が重要。また、ほとんどの国においてBSE感染牛が、ほ乳類の肉骨粉給与禁止措置後に生まれているため、交差汚染防止対策は重要。さらに、消費

者との冷静なコミュニケーションが重要」、マクダイアミド博士からは「英国以外の国ではBSEの人へのリスクは英国と比較して少なくとも2桁、おそらく3桁以上小さい」との推定などが語られました。



さらに12月7日には、1997年にプリオン研究でノーベル生理学・医学賞を受賞したカリフォルニア大学サンフランシスコ校医学部教授のスタンリー・プルシナー氏が講演を行い、プリオンは抵抗力が非常に強い感染性のたん白質であること、また新たな検査法としてCDI法について述べ、BSE検査感度を高めていく必要があると指摘しました。



いずれの講演の後にも、パネルディスカッションや会場からの質疑を通じて、活発な意見交換が行われました。

● 日本全国でも、BSEをテーマに意見交換会を重ねています。

食品安全委員会では本年9月に、BSEのリスク、対策の効果などを検証した「日本における牛海綿状脳症(BSE)対策について—中間とりまとめ—」を了承しました(この内容をわかりやすく解説した「食品安全・特別号(BSE特集)」も発行しています)。

これを踏まえ、10月15日、厚生労働省及び農林水産省から食品安全委員会に対して、①と畜場でのBSE検査の対象となる牛の月齢の改正及び検査技術の研究開発の推進、②SRMの除去の徹底、③飼料規制の実効性確保の強化、④BSEに関する調査研究の一層の推進について、食品健康影響評価の要請(諮問)がされました。食品安全委員会では、これまでもBSE問題について意見交換会を開催してきましたが、さらにこの中間とりまとめの内容について、国民の皆様理解を深めていただくとともに、広く関係者の御意見を今後のプリオン専門調査会などにおける議論の参考とするため、全国各地で意見交換会を開催しています。意見交換会の日程や参加申し込み方法等はホームページでお知らせしていますので、お近くで開催される際には、ぜひお出かけください。

※SEAC:海綿状脳症諮問委員会 (Spongiform Encephalopathy Advisory Committee)

1990年、英国の農漁業食糧省と保健省の諮問委員会として発足。現在は環境・食料・農村地域省、保健省、食品基準庁の諮問委員会として、日本の食品安全委員会と同様に中立公正な立場から、BSE、スクレイピー、変異型CJDに関する専門的科学的アドバイスをを行っている。現在、科学者など17名の委員から構成されている。